

日本大学

T 102・8275
東京都千代田区九段南4-8・24
学務部入学課
TEL 03-6265-8001
http://www.nihon-u.ac.jp/

21世紀を迎え、生命や食、環境などに関わる諸問題が地球規模で解決すべき喫緊の課題として注目される中、生命の本質を理解し、生物資源の利用や開発・保全に係わる先導的な教育・研究を展開しているのが日本大学生物資源科学部です。

その最大の特徴は「国内屈指の研究力」。文部科学省の科研費採択件数では、1000を超える大学・研究機関中、日本大学はトップクラスの22位（私立大学3位）にランクインしています。

その実力は優れた教育力にも現れ、神奈川県藤沢市に位置する広大なキャンパスと全国の研究施設を拠点に、総合的フィールドサイエンス教育と最先端の専門教育で学んだ学生たちは、大学院進学をはじめ、企業や官公庁などで活躍しています。



山室裕教授

屈指の研究力とフィールドサイエンス教育で「生命」や「食」「環境」に関わる21世紀の諸問題を解決できる人材を育成

「農学」を基本に、幅広い領域をカバーする「生物資源科学部」

わが国でも数少ない「生物資源科学」の名前を冠する日本大学生物資源科学部。その学びのフィールドは極めて広く、同学部の基盤の一つである農学をはじめ、水産学や獣医・畜産学、食品学、環境学をカバーする、「生命」や「食」「環境」を総合的に捉えた最先端の学問を展開しています。

「今日、農学が注目を集める理由の一つに、発展途上国における食糧問題などがあります。本学部は、こうした課題に 대응するという応用科学的な側面を持つ一方、食品や食材の一つ一つにどのような機能があるのか、例えば納豆のどんな成分がヒトの健康に寄与するのといった栄養科学的なアプローチも行っていきます。このほかにも、食品ビジネスや国際地域開発学といった社会科学系、あるいは文理融合型の学問を推進していることも、本学部の特徴の一つといえるでしょう」

と、生物資源科学部執行部研究担当で、研究委員会委員長を務める山室裕教授は説明します。

「科研費の採択や共同研究など」「研究の日大」ならではの實力

日本大学の強みは、「研究の日大」と称される研究力の高さにあります。文部科学省の科学研究費補助金（科研費）採択件数で、日本大学は608件（平成30年11月）と、大学や研究所等を合わせた1000を超える対象機関中22位。私立大学では堂々の3位を誇ります。

「これは日本大学全体の件数ですが、生物資源科学部の実績に限って見ても60位台に位置し、食品系や海洋水産系など、農学関連では1、2位を争う分野が多数あります」と山室教授。こうした国内屈指の卓越した研究を支えているのが、日本大学の誇る最先端の研究施設です。

「本学は学部ごとに研究所や研究センターを整備していますが、生物資源科学部も6つの研究施設を擁しています。このうち生命科学研究所では、近年発展の目覚ましい分子生

点から個体やその生態を観察するマイクロな視点まで、あるいは地域の特性や課題を洞察するローカルな視点から地球全体を見渡すグローバルな視点まで、さまざまな視座から21世紀の諸問題にアプローチできることも、生物資源科学部の大きな魅力となっています。

生物と地球を肌で感じるフィールドサイエンス教育

多様な生命の営みや、それを支える地球の環境や生態系を理解するためには、実習教育が欠かせません。横浜はもちろん、古都・鎌倉や湘南海岸のシンボル・江ノ島にも近い、神奈川県藤沢市に広がる生物資源科学部のキャンパスは、東京ドームのおよそ12個分という広大な敷地面積を誇ります。ここを拠点に展開しているのが「総合的フィールドサイエンス教育」です。

「キャンパスには講義棟だけでなく、農場や演習林などもあるため、講義で理論や知識を学んだすぐ後の授業で、実際にフィールドに出かけて実践を、また講義に戻る。そうした学びのサイクルをキャンパス内で完結することも本学の大きな強みとなっています」

このほか、海洋生物資源科学科には静岡県下田市に臨海実験所があり、1年生はここで生物採取船に乗り実習を行っています。また、静岡県富士宮市には富士自然教育センターがあり、くらしの生物学科の1年生全

体から個体やその生態を観察するマイクロな視点まで、あるいは地域の特性や課題を洞察するローカルな視点から地球全体を見渡すグローバルな視点まで、さまざまな視座から21世紀の諸問題にアプローチできることも、生物資源科学部の大きな魅力となっています。

生物学の技術を活用し、微生物の共生に関する研究に取り組んでいます。ほかにも、食品の先端機能を研究する先端食機能研究センターや、環境科学研究の拠点として、生物資源の持続可能な利用の実現を目指した研究を行っている生物環境科学研究センター、人獣共通感染症などの研究に取り組んでいる動物医科学研究センターなども先端的な研究で優れた実績を上げています」（山室教授）

また、わが国最大級の総合大学というスケールメリットを生かし、生物資源科学部だけではなく、医、歯、薬学部など医療系学部との連携による研究や、工学部や芸術学部などと組んだ、学部横断型のユニークな総合研究にも取り組んでいます。

一方で、生物資源科学部では次世代を担う若手研究者の育成にも力を入れています。その成果の一つが大学のフランド創生研究として行われているもので、現在は高たんぱくで風味がよく、味噌、豆腐などの加工品にも最適な大豆の研究などに取り組んでいます。

こうした研究力は学生への教育にも生かされており、その成果は17名の学生が学会などの大きな舞台で優秀賞などの受賞を果たした（18年度）ことなどにも表れています。

新しい生物資源科学の可能性に挑戦してほしい

日本大学は就職実績でも高い実績を誇っています。それを支えている



乗船実習

動物をより総合的に学び「動物資源科学科」

ここで、山室裕教授が所属する動物資源科学科を例に、生物資源科学部での学修を見てみましょう。

同学科では動物全般を研究対象としたカリキュラムを組んでいます。3年次以降は生命現象のメカニズムを理解し、技術の展開を考える「動物の生命科学」、家畜を飼育管理し、牛乳や肉、卵を生産する畜産学の世界を学ぶ「動物の生産と利用科学」、自然界や人の生活環境でさまざまな動物との関わり方を探求する「人と

のが、全国に広がる「日大ネットワーク」の手厚さ。卒業生総数や社長の出身大学ランキングで2万2183人と、2位に大差をつけて全国トップであることはよく知られています（出典：朝日新聞出版「大学ランキング 2020年版」）

こうした中、生物資源科学部でも就職支援センターを中心に充実したキャリア支援活動を展開。平成30年度就職等決定状況でも、就職希望者に対する就職率は97・5%に達し、41・0%が従業員500名以上の大企業に就職しています。

最後に、山室教授は受験生の皆さんに次のようなメッセージを送っています。

「本学部に入学したら、とにかく一つ研究に打ち込んで、その喜びをぜひ感じ取ってほしい。大学院に進めば、学会発表などを通じて学問の歴史に名前を残すこともできます。また、今日ではAI（人工知能）やロボットなど科学技術の進展により、農林水産業や畜産業のあり方も大きく変化しつつあります。そうした新しい技術に挑戦したい方も、ぜひ本学の扉をたたいてください」

(1) 総合的フィールドサイエンス教育

生物資源科学部の学びの基本は、生物と地球を肌で感じる。そのため、教室での座学だけでなく、フィールドでの実験や実習を通じて、さまざまな生命の営みやそれを支える地球環境を体感することを目標としている。また、国際教育・研修交流も積極的に推進し、グローバルな教育・研究を展開している。学部生に対しては各学科ごとに、アメリカ合衆国、台湾、タイ、オーストラリア、イギリス、フィリピンなどの大学や研究機関と協力して多様な実習・研修を行っている。



海外研修



森林資源科学実習

(2) 海外研修制度

日本大学では学生時代にグローバルな視点を養うため、多彩な留学・研修制度を整備。さらに、生物資源科学科でも独自の海外研修制度を設けている。

- ▼アメリカ合衆国（獣医、森林資源科学、生物環境工学科）
- ▼イギリス（森林資源科学科）
- ▼オーストラリア（生命化学、動物資源科学科）
- ▼タイ（生命農学、国際地域開発学）
- ▼台湾（生命農学、食品ビジネス学）
- ▼フィリピン（国際地域開発学）

(3) 研究の日大

学術誌掲載論文総数ランキングでも、「エルゼビア」が18位（私立4位）、「ネイチャー」が34位（私立6位）とトップクラスを誇る（出典：朝日新聞出版「大学ランキング 2020年版」）。このほか、平成29年度の民間企業からの受託研究に係わるランキングで件数4位、研究費受入額2位。特許権に係わるランキング（平成31年2月 文部科学省資料より集計）でも、件数で14位（私立3位）、特許権実施等収入の額では全国6位（私立1位）となっている。

卒業研究

北海道・東北
関東
東京・神奈川
中部
近畿
中国・四国
九州